

雨雲 雪雲 霽電 雷零 雹需 震靈 霄霆 霈霍 霓雲

水の文化書誌 《雨》

これまで「水の文化」に関してどのような著作が世に出ているのでしょうか。今回からテーマ毎に、様々な文献を紹介して参ります。最初は「雨」から入ります。

映画にはよく雨のシーンが出てくる。収穫時、野武士が農産物を奪いにやってくる。農民と七人の侍は、野武士と壮絶な闘いを挑む。大雨の中、七人の侍は泥水に足をとられ、のたうちまわりながら闘う。黒沢明監督の「七人の侍」は余りにも有名である。この大雨は何と表現されるのだろうか。収穫時だから秋の雨であることは確かである。高橋順子文、佐藤秀明写真『雨の名前』（小学館、二一年）をめぐると、「澎雨」（ほうう）が目にとまった。「澎」は「水勢のさかんなさま、洪水を引き起こしかねないほど烈しく降る秋・冬の雨」とある。この書は雨を四季ごとに分類し、短歌と俳句と美しい写真から成る。

気象学者の倉嶋厚監修、原田稔編『雨のことば辞典』（講談社、二一年）に、「米作りには、夏の高湿と潤沢な水が必要である。古来、日本人は、潤沢な、しかし変動の大きい、災害と恵みの両方を持ってくる雨とつきあひながら暮らしてきた。そのため日本には雨のことばが特に多い」と述べられている。ここには全国の方言を含め雨のことば一一九語が収集されている。例えば、雨一犁（あめいちれい）：耕作に適したちょうどよい量の雨、門掃位（かどごはきべらい）：岡山県苫田地方で埃が立たなくなるほどの少量の雨、沛然（はいぜん）：雨が盛んに降るさま、日照雨（そげえ）：日が照っているのに降る雨、三束雨（みつかあめ）：雷雲が発生してから稲を三束も束ねないうちに降り出すところから生まれた言葉。群馬県沼田地方などで使われる」と、千変万化の雨の言葉が収められている。日本人の表現の豊かさに改めて驚く。これはまさしく水の文化である。

三束雨については、登丸芳夫著『御何鉢（みかば）の三束雨』（文芸社、二一年）がある。群馬県勢多郡粕川村の天気俚諺に関する研究の書である。ネコが耳で顔を洗うと雨。両毛線の汽車の音が聞こえると天気は下り坂。赤城山が近くに見えるると雨が降る。このような雨の俚諺（りげん）は、粕川村が内陸性の気候のため冬はたいへん寒く、上州名物の空っ風が吹き、夏は寒く雷が鳴ることも多い風土のなか、長年、村人たちの暮らしから醸し出されたものである。

三束雨については、登丸芳夫著『御何鉢（みかば）の三束雨』（文芸社、二一年）がある。群馬県勢多郡粕川村の天気俚諺に関する研究の書である。ネコが耳で顔を洗うと雨。両毛線の汽車の音が聞こえると天気は下り坂。赤城山が近くに見えるると雨が降る。このような雨の俚諺（りげん）は、粕川村が内陸性の気候のため冬はたいへん寒く、上州名物の空っ風が吹き、夏は寒く雷が鳴ることも多い風土のなか、長年、村人たちの暮らしから醸し出されたものである。

レインドロップス編著『雨の事典』（北斗出版、二一年）は、雨が森や街に降り、川に流れ出し、海に注ぐ流れを循環系とらえている。第一章「雨と日本人」では、文学、歌、映画の係わり、第二章「暮らしに生きる雨」では、讃岐のため池、地下水の源も雨、水の自給自足、島の暮らし、雨乞い、第三章「地球をめぐる雨」では、モンsoonアジアの中の日本、雨を科学する第四章「雨水を活かす」では、ハワイは水の島、イランの地下水路カナート、雨水調整池等の項目から構成されている。



